

柳ヶ瀬本通における「プレイスメイキング」実験—一人が滞留する理由の考察—

岐阜大学 学生会員 ○谷口史織
 岐阜大学 正会員 出村嘉史

1. はじめに

近年、日本の都市部の各地で有効利用されていない公共空間を活用し、人の居場所にしようという取り組みが行われている¹⁾。そのため滞在する人に着目したアクティビティを評価する手法が様々に考察されはじめている²⁾。地方都市においても、公共空間での人の居場所づくりが実践されているが、人口の少ない地方都市においては、人の居場所をつくっても、あまり人が集まらず、イベントのようにして人を集める事例もあり、日常として人が滞留できる居場所づくりをすることが課題となっている³⁾。

現在日本において、公共空間はすべての人が平等に利用できるという原則のもと、禁止事項を決めて管理されていることが多い。しかし「すべての人に向けて平等に」場づくりを行ったとき、自由なアクティビティを生じさせることは常に困難が伴う。地方都市において人が滞留したくなるような場づくりを目指す場合、すべての人が公共空間で自由に滞留するという原則を含めて条件を整理しなおす必要があると考えた。

本研究は、岐阜市の柳ヶ瀬商店街、柳ヶ瀬本通を対象として場づくりの実験を実施し、人の滞留に必要な要件を考察し、実際は人と人の関係の構築こそが重要であるということを確認することを目的とする。

2. 主人の存在と人の滞留に関する実験

1) 仮説・目的

人と人との関係性と滞留傾向に関係がないものと仮定すると、すべての人に平等に開いた空間であれば、休憩目的や興味を持った人は滞留するはずである。

空間設営によって「滞留できる場所」ということを視覚的に訴え、その場所を管理しながら自らも楽しく利用している「主人」を配置した。場所の使用をやりわりと許可する主人の存在により、モノによる空間の構築が人を誘引するものと考えた。

2) 実験概要

2019年7月20日(土)「柳ぶら楽市」という県内物

産の販売を行う市場の開催日に実験を実施した。10時30分から14時にかけて、柳ヶ瀬本通路上に人工芝で区画した空間を設営し、そこに主人役を配置して実証実験を実施し、現地観察とビデオカメラによる状況の記録を行った。場の中に常に3~5人の「自然に過ごす」主人を置き、通行人の行動を観察した。(図1)



図1.実験風景

3) 結果

現場周辺の通行人を対象とし、歩く位置と、場への視線を記録したところ、大多数の通行人は設えた場と、関わりを避ける距離を歩くことが分かった。一部の人は、関わりを持てる距離を歩いていたが、実際に主人と会話をしたり、滞留したりするといった関わりをする人はそのうちの2%程度であった。場に視線を向けるように興味を持っている様子はあったが、実際に関わることのハードルはとても高いのだということが分かる。

場に滞留した人に着目してみると、26人が該当した。特に主人と関わりを持たなかった人が11人で、その滞留時間は1,2分程度であった。人工芝に足を踏み入れても、主人とは離れた場所に滞留した。この場に興味を持って近づいた人や、休憩を目的で訪れた人の大多数が、主人との交流を避けるように滞留した。一方で、そもそも主人と知り合いであるか、そういった人物が連れてきた人が15人おり、それらの人は滞留し、場に近づくことや滞留に対して何の抵抗もなく、会話をした。

以上のことから、すべての人に開いた空間であっても、誰でも滞留する場にはならず、主人と関係のない人はほとんど滞留せず、関係のある知り合いは滞留するという結果が得られた。

3. 匿名性の場づくりと人の滞留に関する実験

1) 仮説・目的

先の実験結果を踏まえて、主人を不明瞭にして徹底して人と人との関係性を排除した空間づくりを行えば、誰にとっても滞留しやすい空間となるのではないかと、という帰無仮説のもと、実験を行った。

そのためにテーブルとイスを設置するだけの簡易な場づくりを行い、匿名性を持った空間とすることで、人の滞留の発生の有無を確認する実験を行った。

2) 実験概要

2019年9月7日(土)の10時半から15時半にかけて、前回と同様に「柳ぶら楽市」開催日に柳ヶ瀬本通路上で実験を実施した。その場所を管理、観察するために、配置したテーブルの端の1つは学生が座り、常にその場に居るようにした。現地観察とビデオカメラによる状況の記録を行った。(図2)



図2.実験風景

3) 結果

前回実験と同様に分析を行ったところ、前回実験と比べて、1m以内の距離を歩く人の数は約2割増加していた。しかし、場に視線を向ける人の数の割合は約15%減少した。このことから、匿名性があることにより、興味がある、なしに関わらず、場に近寄ることへの抵抗感は少なくなったということが分かった。場の設えにおいても、簡易的なテーブルやイスを設置した程度なので、この場に違和感を持って視線を向ける人は少ないように見えた。しかし、やはり大多数の人は通り過ぎるだけであった。

場に滞留した人は21人居り、そのうち8人は1,2分の休憩のみ、13人は何らかの設えに興味を持った様子であった。13人のうち、8人は1分未満の滞留で、残りのうち3人は4,5分、1人は10分、主人が話しかけて対話生まれた1人は1時間以上滞留

した。興味を持って滞留したとしても、すぐ立ち去る人が多いという結果が得られた。21人のうち主人と会話があったのは4人のみであった。

以上のことから、関係性を排除した空間では、興味のあるなしに関わらず、滞留は発生し難いという結果が得られた。すなわち匿名性の高い空間を設えれば滞留が発生しやすくなるという仮説は棄却できる。

しかし例外的に、対話が起これば長時間の滞留が発生したことから、関係性をつなぐ意思のある人は長時間滞留することが分かった。

4. 考察

柳ヶ瀬本通りにおける2回の実験から、主人という存在を排除し、間柄を持たない、匿名性の高い場づくりを行ったとき、人の滞留は起り難いことに加えて互いに会話をすることもほとんど起こらないということが明らかになった。一方で、知り合いやその場で知り合った人と会話、対話が発生すれば、少ないながらも積極的な交流が生まれていた。以上のことから、今後の地方都市において、人を中心とした自由にアクティビティが生まれる場づくりを行う際、少なくとも人と人との間の関係性が不可欠であることが示された。

今後の展開として、設えた場にカフェを併設し、カフェの店主がその場の主人となり、商品を媒介としてその場に滞留する人との関係づくりを行う目的で実験を続け、店主と客の間柄ができた際の人の滞留について考察するつもりである。

参考文献

- 1) 高橋亮, 野原卓, 三浦詩乃「都心部における公共空間としてのストリートの役割とその実態に関する研究—横浜市日本大通りにおける都市政策上の位置づけ・空間利用実態・利用者意向に着目して—」公益社団法人日本都市計画学会 vol.54, No.3, 2019, 10
- 2) 三友奈々「プレイスメイキングから見た公共空間の滞留に関する考察—米国ブライアントパークにおける設定行為に着目して—」芸術工学会誌 No.62, 2013
- 3) 泉山壘威, 中野卓, 根本春奈「人間中心視点による公共空間のアクティビティ評価手法に関する研究—池袋駅東口グリーン大通りオープンカフェ社会実験 2015年春期のアクティビティ調査を中心に—」日本建築学会計画系論文集 第81巻, 第730号, 2763-1773, 2016, 12